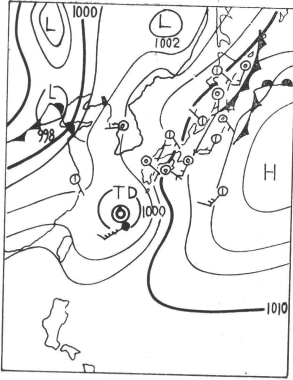
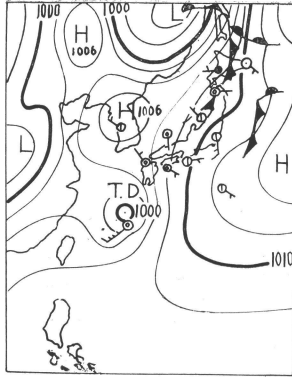


山の雲



第1図 1961年7月23日12時



第2図 1961年7月22日18時



〔写真 1〕

〔写真 1〕

(7月23日 午前11時頃、雪倉岳中腹から白馬岳方面)

この日の天気図は第1図のごとく前日本邦を通過した寒冷前線は東にぬけたが、それ以上東進せず、そのまま停滞した形となっていた。そのため白馬岳山頂から眺めると西方は完全な快晴であるが、東方は上層雲が多く、寒冷前線の上端部を示していた。その上層雲が山の上にかかる、山という地形による局地的擾乱と組み合わせると種々の変形雲を現出する。写真の上層雲もその一種であろう。この形はものの数分後には消えてしまった。

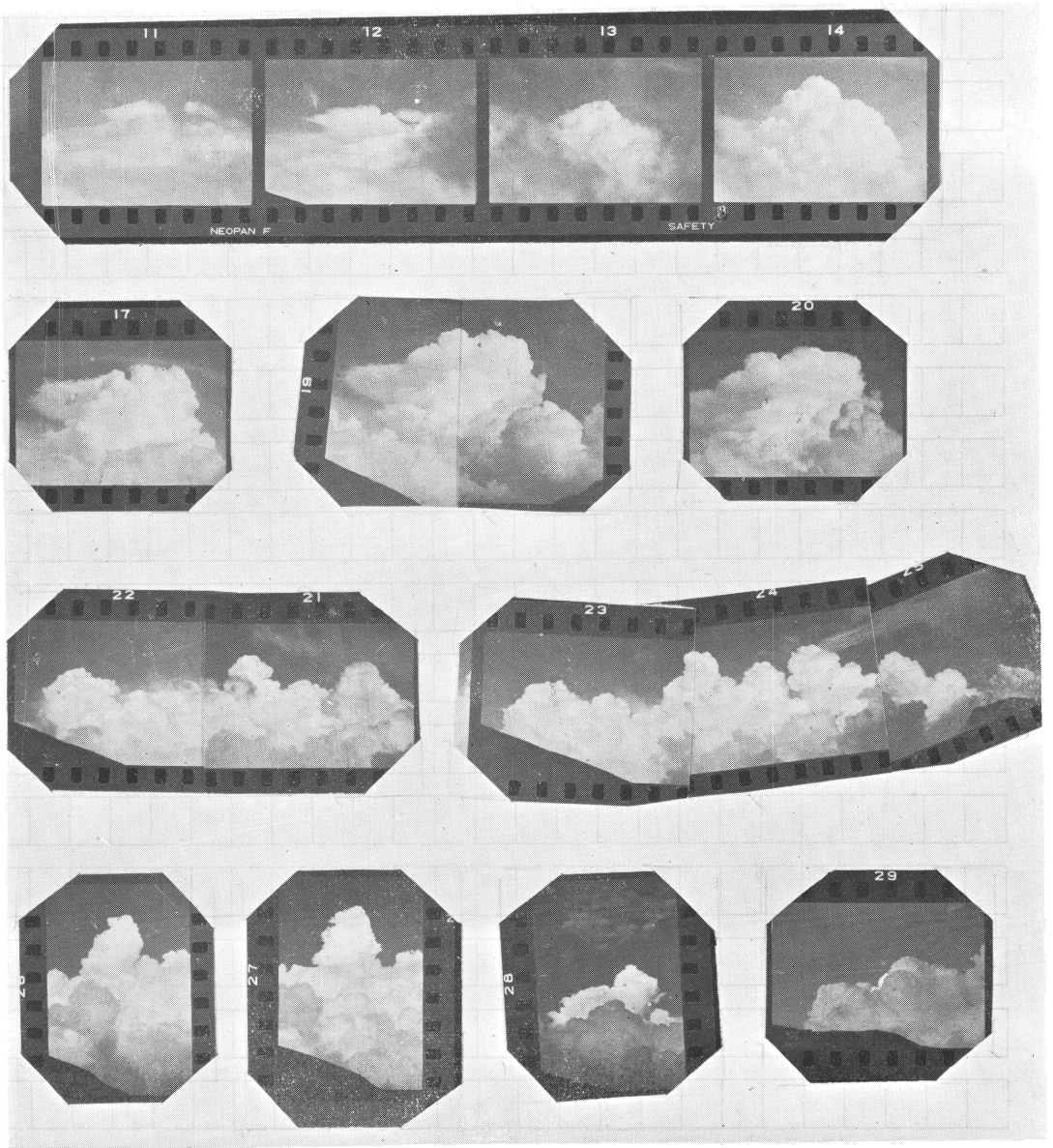
〔写真 2〕

(7月23日午前11時30分頃、雪倉岳山頂から白馬岳方面)

この写真は写真1の30分後のものである。このときの風は東ないし北東の風で、谷から吹上げる気流によってガスが上がっては消える。あわただしい雲行きとなる。面白いことに反対側の朝日岳方面を振りかえると、ガスは北側から吹き上り、稜線をこえて黒部側に下ろうとするが、越え切れず、風上側は雲に包まれているが風下側は晴という分布を示していた。午後になると風は南風が変わった。すると今度は黒部側から雲が吹き上がりはじめ、やがて山は一面に濃いガスに包まれてしまった。



〔写真 2〕



〔写真 3〕

〔写真 3〕

(7月22日 午後4時30分～午後6時30分, 白馬岳から東を望む)

22日の夕方は長野県下にやや強い雷雨が発生した。第2図の天気図を見ると、この日の雷は熱雷と思われるが、雷雨天気図によると、白馬岳のすぐ東にある安曇付近では $T^1(1740 \sim 1840)$ が、さらに東の長野付近では $T^0 \bullet (1736 \sim 2125)$ が観測さたている。我々はこの雷

雲の発達、衰弱を丁度真横から観察する機会をえたことになる。はじめの写真をとったのが大体午後4時半頃、それから連続的に雲の状態をとってゆき、最後のは日暮れ近くで積乱雲が衰弱期に入ったとき(午後6時半頃)のものである。

(撮影 岡野光也)
(解説 奥山巖)